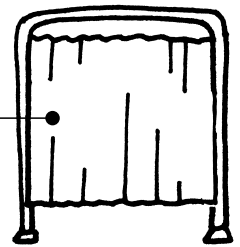


健康倶楽部



やさしい 股関節痛の はなし

第1回



生後3カ月の乳幼児健診で、足の開きが悪く将来治療が必要になるかもしれないといわれました。これは病気でしょうか。また、今後どのような治療が必要でしょうか。



狩谷 哲

(かりや・さとる)
1994年金沢医科大学卒業後、昭和大学整形外科教室入局。昭和大学附属豊洲病院、亀田大学高津中央病院、亀田総合病院などを経て、2004年米国のアンリニソン整形外科クリニック留学。2010年勤務。2011年副院長に就任。



先天性股関節脱臼という病気が考えられます。生後3〜4

カ月の健診で見られることが多く、股関節が生まれつきずれていたり、はずれている病気で

本人に多いといわれる人種的要因のほかに、巻きオムツなどの使用で新生児の下肢の動きを妨げるような文化的習慣が日本にあったことが影響しているとの見方もあります。ほかには全身関節・靭帯弛緩性(関節・靭帯がゆるい)、ホルモン分泌、遺伝的素因などが関与しているとされ、出産前の胎内異常位、出生後の股関節肢位(足の位置)などの関与も疑われています。

赤ちゃんは脱臼が起きて痛みがなくて泣いて訴えることがありません。主な症状は①赤ちゃんを仰向けに寝かせて膝を曲げた状態で股を広げると、股関節にポキポキというクリック音が聞こえる。②両足を曲げて、膝が外側を向くように広げると、開きが悪い。③両足をそろえると、太ももやおしりのシワの数が左右で違う。膝の高さも、足の長さも違う。④歩き始めが遅かったり、足を引きずるように歩くなどが挙げられます。放っておくと関節が変形することもあるので、おかしいなと思ったら整形外科を受診しましょう。オムツ指導や、脱臼を回復するための器具「リメンビユーゲル」の装着や牽引治療、手術的治療法もあります。早期発見が重要で、適切な治療をおこなえば将来的にも問題はあり

ません。